
死、それは・・・

caviar

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死、それは・・・

【NZコード】

N0191A

【作者名】

caviar

【あらすじ】

逆上した殺人者に刺されてしまった和葉。和葉はそんな中、平次に・・・

和葉が刺された。

それは突然の事やつた。俺が犯人捕まえよ思つたとき、

逆上した犯人は俺と警察の前で包丁もつて、走り出したんや。

ほんで、その先には・・・和葉がおつた。そいつは和葉の脇腹
にナイフを突き刺したんや・・・。

アタシはお腹を刺された。

不覚にも犯人に刺されてしもた。

でも、意外と痛みはない。

アタシ死んでしまうんやろな・・・

「和葉～～～！……！」

右の脇腹を刺され、崩れていく和葉の身体を平次は叫びながら支えた。

犯人の方は、大滝警部が取り押さえられたようだつた。すぐに手錠をかけられ

数人の警察官に取り押さえられていた。だが、そんな光景を見ている余裕

は平次にはなかつた。

「平次、叫びすぎやで……」

和葉は言つた。しかし、辛いのだらう。その声はいつもの甲高い

明るい声とはちょっと違つていた。そんな和葉の右腹を平次は必死に

手で押さえ止血しようとした。が、医学知識がある平次には

分かつっていた。あまりにも和葉の傷口が大きすぎると言つ事に……。

血管が大量に切れているのだろう、平次の手はすでに血まみれだつた。

とにかく出血が酷すぎたのだ。

「何、辛氣臭い顔してんや・ハア・ハア、こんくらいで・ハア・平氣や・ハア」

とは言つものの、和葉の呼吸が荒くなり、苦しそうなのは目に見えていた。

「平ちゃん！大変や。祭りで国道が渋滞しとるから、救急車これへんてつ！！」

犯人を取り押さえ和葉の状態を見てパニくったのか大滝警部は言った。

「のまま救急車が来るのをじつと待つてたら和葉は・・・死ぬ。

そつ考えた平次は・・・

「パトカーで病院まで運んしてくれ！！」

と大滝警部に叫んだ。パトカーも緊急車両だ。

有事の際にはサイレンを鳴らして走行が可能だ。もちろん、

スピード違反・信号無視も許されるだろ？。そして今は、有事である。

何故これほど単純な事に大滝警部は気づかなかつたのだろうか？

恐らく、刑事部長の娘がさされて、何より親しい和葉が刺されてパニックに陥つていた為だろ？。

「ちゅうとまつとつてやーー！」

我に返つた大滝は急いで自分のパートナーに向かつた。

「和葉、しつかりせいやーすぐ病院連れてつたるからなーー！」

平次は和葉に向かつて叫んだ。

「だ、・だ・から、大・丈・夫ゆ・う・て・る・や・ん・・・・」

和葉は今にも死んでしまいそうな声で平次に言つた。

だが、和葉自身、自分が助かるとは思つていなかつた。

包丁で思いつきり刺されたのだ。

「（アタシ、死んでもうんやろか・・・・・。当たり前やな・・・・・

こんな血、ぎょーさんでてるんやし・・・・・）」

氣を抜いたら今にも氣絶してしまいそうな辛い状況で

和葉は必死に耐えていた。耐え切れなくなつた時、それは

死ぬ時だと分かつていてから・・・・・。今は死にたくなかつた。

平次に想いを伝えるまでは・・・・・

「なあ、平次」

和葉はかすかな声で平次に向かつて言った。

「だまつとれ！」

平次はそう和葉に怒鳴りつけると、もはや力が入っていない
和葉の身体を自分の背中に背負つた。怪我人を動かしてはいけない
事ぐらい

平次は知つていた。だが、止むを得なかつたのだ。

ここに担架などという代物は存在しなかつたから・・・。

そういう訳で平次は和葉の、和葉は平次の温もりを感じ取る事が出来た。

「（最期にしてはちよづどええな・・・）」

和葉は平次の背中でそんな事を考えていた。

平次は慌てて和葉を近くまで運んできてくれた大滝警部のパトカー

の後部座席に乗せた。そして自分が乗り込むと同時に大滝警部に

を支えるためである。そして一人が乗り込むと同時に大滝警部によつてパトカーは発進された。けたたましいサイレンを鳴らしながら・・・

「平ちゃん！しつかり捕まつときやーー！」

大滝警部は平次に言った。

「・・・・平次、聞いて・・・ほしいことがあるんよ

少々走つた所で和葉が震えた声で言った。

「喋つたらアカン！ー！」

必死になつて和葉の傷口を止血を試みていた平次は叫んだ。

今までまたかなりの血が出たことが平次にはわかつていた。

もちろん、本人である和葉にも・・・

「アタシな・・・ハア・・・平次のことが・・ハアハア・・・ハア・・・メツチャ・・・ハア」

それでも和葉は喋り続けた。

恐らく、少し喋るだけでも和葉は激痛を感じているだろ。

そんな辛い状況下にもかかわらず和葉は喋り続けたのだ。

「喋たらアカン！！死んでまうでっ！！」

平次はそんな和葉を叱責した。

めちせすきせたんよハアハア

そんな和葉の言葉に平次は絶句した。

•
•
•
•
•

「ハア・・・・ハア」

•
•
•
•
•

「ハア・・・・ハア」

和葉の荒い呼吸音以外の沈黙が続くパトカーの後部座席。

「！？・・・か、和葉・・・・・俺も、俺もお前が好きや！だから喋らんぐれ！」

平次は冷静になると同時に言葉を返した。

そして必死に和葉を抱きしめながら哀願していた。

「・・・それが聞けて・・・ハアハア・・・安心したわ・・・振られるなん・・・

やないかって怖かっただんや・・・ハア」

「あほ、喋つたらあかんゆうとるやないか！！」

平次は大声で叫んだ。

「・・・そんなん・・・どっちみち、同じや・・・・・

和葉はかすれるかすかな小声で平次に言った。

故意にではない。もう体力が残つていなかつたのだ。

それでも和葉は平次の頬にペタンと血まみれの右手を当てる

平次にとつて和葉の手は意外と小さかつた。

一瞬、平次は身体を硬直させた。

「・・・今までありがとうございました、平次・・・」

蚊の泣き声のような和葉の言葉は平次に届いた。

「平次、愛してるで・・・」

和葉は最後の力を振り絞るかのように言った。

平次が言葉を返そうとしたその時。

和葉の手はゆっくりと平次の頬から離れていった。

そして力なさで下にぱちゃんと手は後部座席の

クッショ n の上に倒れてしまった。

「・・・和葉？」

頬に血をつけた平次が疑問の声を上げたと同時に

和葉の目はゆっくりと閉じていった。

「あほ！和葉！.. 気絶したらアカン！.. 死んでまうで！..！」

和葉を抱きかかえ泣き叫びながら平次は和葉の耳元で叫んだ。

しかし、和葉から言葉が帰つてくることは無かつた。

還つてくることは決してなかつた。

脈拍を確認する平次。しかし・・・・・・・・脈は無かつた。

冷たくなつて いる和葉の身体。

残されたのはパトカーのサイレント平次の泣き声、

ルームミラーで状況を見ていた大滝警部の涙・沈黙ただそれだけつた。

「か、和葉・・・・」

平次が再度、和葉に呼びかけるが和葉からの応対はなし・・・。

まるで眠っているかのような和葉の身体それだけ・・・・

平次は泣き叫びながら和葉を必死に抱きしめ、呼ぶ。

しかし・・・・

和葉がその言葉を返す事はそして息を吹き返す事はなかつた。

つまり、それは和葉の死だつた。

「俺の、俺のせいや・・・。俺が和葉をあんなとこ連れてかんかつたら・・・」

引きつった顔を浮かべる平次。その様子を見て即座に大滝警部は車を道端に止めた。平次が今にもおかしくなりそうだったからだ。もちろん、

大滝警部自身、和葉の死は受け入れられてはいない。だが、それ以上に

平次の様子は尋常ではなく今にも走行中の車から飛び降りかねない危険な状態だつたからだ。

「・・・平ちゃん・・・」

大滝は平次にそれ以上の言葉をもちえなかつた

「・・・・ハハハ、そんなアホな、和葉が死んだやと・・・？」

気が狂つたかのように突然平次は笑い出すと、つぶやいた。

「ははは、そんなアホな」

「・・・・和葉・・・・」

暫く笑い続けた平次だが、笑い終わると和葉の名を一回、口にした。

「すぐ、俺も行くからな」

そして、すぐにそつづぶやくと、平次はポケットから小刀を取り出した。

平次は小刀を自分の首筋に当てた。

「へ、平ちゃん！！」

それを見た大滝警部は後部座席にいる平次に大声を張り上げた。

「大滝ハン、俺も和葉んとこ行くわ・・・・」

平次は静かに言った。

「平ちゃん、アカン！死んだらアカン！－！」

大滝の叫び声が車内を木霊した。しかし、大滝は身体が動かなかつ

た。

いや、動けなかつたと言つ方が正しいだらう。

「親父に宣しく、伝えてくれ・・・」

平次は死んでしまつたよつた声で言つた。

「あかん！！」

大滝の叫び声が車内に響き渡つた。

次の瞬間、平次の咽からは夥しい血液が噴出していた。平次はゆつくつと

和葉に覆いかぶさるよつて倒れた。ゆつくつと・・・。

コナンが和葉の死を知つたのはその晩だつた。

服部平蔵、直々に毛利探偵事務所に電話がかかってきたのだ。

電話を取つたのは小五郎だつた。その数分後説明を受けた

小五郎が電話をおいた。そして小五郎は神妙な顔で蘭とコナンに

大阪での出来事を伝えたのだつた。

それを知つた時、コナンは驚きを隠せなかつた。蘭は和葉の死を知り大粒涙をぽろぽろと流していた。小五郎にいたつては二人ほど驚いていないものの、やはり少々驚きを隠せないと言つた様子だつた。

「和葉ちゃんが死んだなんて・・・」

翌日、新幹線の車内で大阪に向かう中、蘭はつぶやいた。

早朝の列車だつた事と平日だつた事、そして列車が博多行きではなく新大阪行きだつた事、出張客が少なかつたため、車内はガランとしていた。

「なんでも、逆上した犯人に刺されたそつだ。」

小五郎は言った。

列車は新横浜を通過しようととしていた。

「平次兄ちゃんは！？」

「危ない状態らしい」

小五郎はそれだけ言つと窓の外の景色を見たまま黙り込んでしまつた。

ちょうど小五郎が外を見た時、列車は新横浜駅構内を走り抜けてい る所だった。

「そんな・・・」

蘭が弱い声を出した。

コナンは言葉を出せなかつた。

複雑な気持ちで一杯だつたのだ。

「（・・・服部・・・）」

とにかく最悪な状況だけは避けてほしかつた。

平次の死という最悪な状況だけは・・・

列車はそんな彼らを乗せ、次の停車駅名古屋に向けて、

そして京都・大阪に向け走つていった。

大阪の病院にたどり着いた時、そこには平次や和葉の両親そして大滝警部がいた。遠山刑事部長は涙を流し、静華は祈つていた。

服部平蔵は相変わらず目を細めたまま静かに手術室の外の長椅子に座つていたが、どこか辛そうな表情をしていた。大滝警部は椅子に座つたまま、まるで取調室で尋問されている殺人者のごとく、頭を抱え黙り込んでいた。責任を感じているのだろう。

病院の通路はそんな異様な光景だった。

「あのお・・・平次君は？」

一番冷静だと思われる平蔵に小五郎は真剣な声で聞いた。

しかし、平蔵はすぐに返事を返さなかつた。

「・・・・・」

そんな平蔵の様子をじつと伺う小五郎。彼の後では蘭とコナンがその様子を同じくじつと伺っていた。

「・・・まだわからへん」

少ししたら短い言葉であるが言葉を返してくれた。

「もうですか・・・・」

小五郎はそれだけを言つと彼らと回じように椅子に座つた。

丸一日以上、平次は田を覚まさなかつた。恐らく同じくこの人たちはそれから一睡もしていなかつた。その証拠に田のまわりには隈をつくつ何より疲れた表情をしていた。

「のぐらこの時間がたつただろうか？」

コナンが時計を見たら数時間程度だった。時刻は午後三時

を示していた。そのときだつた。部屋の中から一人の看護士

が出てきた。20代後半の女性で右脇にはカルテや書類が

入つていると思われるブルーのクリアファイルを持つていた。

「服部平次君の関係者の方ですね」

小五郎に向かつて真剣な声で看護士はいつた。

「はい」

小五郎は言葉を返した。

看護士は真剣な表情をしていた。

「平次君の容態は・・・」

そこまで言つて一回言葉を切つた。

「ゴクッ

その様子を見て唾を飲み込む一同。

「峠を越え、意識もすぐに回復するやつです」

にっこりと笑顔を作り言つた。

その看護士の表情につられて堅くなつていた

皆の表情が一遍に緩んだ。

それでも数秒後には和葉が死んだことを思い出し、一同は

再び暗くなつたのだが・・・。

303号病室

ここに平次は眠つていた。彼のベットを取り囲むように皆並んだ。

麻酔がそろそろ切れ、意識を取り戻す時間だった。

「うへへへ

突然平次の声が漏れた。

「平次！！」

静華は息子の声を聞いて叫んでいた。

そして平次の口はゆづくつと開かれた。

「和葉は！？？」

それが完全に開かれたと同時に平次は叫んでいた。

一同は静かに首を横に振った。

「・・・和葉、やつぱり死んだんやな・・・」

平次は普段から考えられないかすかな声でつぶやいた。

頷く事も出来ず、一同は難しい顔をしていた。

「服部君・・・前に和葉ちゃん言つてたよ。

『アタシが死んでも平次には生きてほしい』って・・・

蘭は静かに言つた。蘭が和葉からその言葉を聞いたのは
美國島での事件の直後だった。矢の話をした時に和葉が
蘭に言つた言葉だった。

「・・・和葉・・・」

平次はもう一度和葉の名をつぶやいた。

「平次ーもつこない馬鹿な真似するんやないー」

そう言つたのは平蔵だった。

『本当に心配したんやで』、やつ言つて居るようだった。

「やつやで、平次君。和葉のことはもつしゃーない」

その意外な言葉には皆驚き、その音源を振り向いた。

その言葉を発した人物、それは遠山刑事部長だった。

「平次君、和葉の分まで生きてくれ・・・生きてくれんと

和葉の為にならへんのや・・・頼むから生きてくれや」

遠山刑事部長は涙を流し掠れた口調で言つた。

その言葉は皆の胸の中で何度も何度も木靈した。

平次はそんな遠山部長の言葉に涙を流した。

大粒の涙を一滴だけ・・・。

『和葉？ オレ生きといつてええんやろか？』

—何を当たり前な事いづん？ -

『やけけどオレお前を・・・』

—守れへんかつただけやん。 -

『でもそれは...』

—平次まで死んでじゃないするんや！

おひちやんとおばちやん悲します氣なん...

そんなんやつたらしつかり生きやー！ -

『和葉・・・』

—わよなー

『・・・わよなー、和葉。 ありがとな今まで・・・』

服部平次は誓いました。

必ず、和葉の墓を守ると・・・。

そして今後和葉以外のどんな女性をも愛さないと・・・。

服部平次は誓いました。

涙を流して・・・。

(後書き)

和葉「何やねん！この作品！？」

ドゲシボコバキボコゲシ

和葉 - 今田れいな 今田れいなくん!!!」

トガシホンハキントークン

Ca via n. 65

caviar 「いや、これは我々の為に必要な・・・」

和葉「絶対に必要やない!!!!」

caviar 「そう断言せんへんでも・・・」

和葉「必要やないつちゅうたら必要やない！！！次回投稿、せんで

もいいでつ！」

caviar—あのう、私管理者なんですが……（だから投

稿にてなんですか？」

和葉

・・・・ そんなんどうでもいいやん！」

お読みいただきありがとうございました。今回はメタモルフォーゼ製作中に

思いついたことをほいつと書いただけの作品ですのでもいつもにまして
変な作品だと思います。実はこのお話、本当にまだ続くのですがそ
れは

まあ制作できれば公開したいと思つて います。
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0191a/>

死、それは・・・

2010年10月15日00時38分発行